

伝説の主人公をモチーフにした地域文化振興事業 —千葉県市川市の「手児奈フェスティバル」に携わって—

根 岸 英 之

はじめに

岩手県遠野市を始めとして、□承文芸を活用した地域おこし

や文化事業は、各地に見られる。^①論者の居住・勤務する千葉県市川市は、東京の郊外都市であるが、『万葉集』にも詠われた伝説の美女「真間の手児奈（ままのてこな）」（手古名など表記はいくつかある）ゆかりの地として知られ、この伝説の主人公を活用したまつり・芸能・ミニュメントなど、いろいろな試みが行われている。^②

へのオリジナルメロディーの公募、手児奈を冠した文学賞（短歌俳句・川柳）の公募などをを行い、市川と手児奈を全国にアピールしようとする企画であった。^③

論者は、この事業に市の文化行政担当課職員として携わった。本稿では、この事業を事例に、①伝説の主人公が文化事業のシンボルに登用された経緯、②□承文芸の研究者でもある行政職員としての論者が、どのような点に留意をしてこの事業に携わったか、③公募によって寄せられた手児奈像はどのようなものだったか、などを提示し、④現代の地域文化、ことに市川市のような都市部において、□承文芸はどのような位置を占めているのか、⑤その中で、□承文芸研究者は、どのような役割を果たし得るのか、といった辺りを問題提起したいと考える。

中でも西暦二〇〇〇（平成一二）年度には、千年紀を契機に

市川の文化の魅力を全国に発信しようと、行政による「二〇〇〇年文化振興事業」の一つとして、「手児奈」を市川の文化芸術の象徴に掲げた「手児奈フェスティバル」が実施された。

これは、市民による実行委員会が組織され、手児奈をモチーフとしたシンボルマークの公募、手児奈を詠んだ万葉集の和歌

1 「手児奈フェスティバル」の発想

「手児奈フェスティバル」は、平成一二年度末に「市川の文化の魅力を全国発信する事業を何か企画せよ」という市長の特命により予算化された事業で、平成一二年度に入り、「文化アドバイザー会議」という作家・音楽家・美術家・郷土史家など十名で構成される協議会のような組織で、具体的な内容が検討された。

この文化アドバイザー会議で、市川が全國にアピールできるシンボル的なものは何かという議論がなされ、「手児奈」をシンボルにした文化事業にしていこうということになり、「市川二〇〇〇年文化振興事業実行委員会」が設立され実施された。

「手児奈」は、日本最古の歌集『万葉集』に詠われた伝説の女性で、市川が全国的に誇れる象徴として、誰もが思い浮かぶものであった。⁴文化アドバイザー会議の構成員は、日ごろから市川で地域文化に関心を持って活動しているメンバーであり、こうした認識が市民の中にあるということを、みな感じていたために、「手児奈」がシンボルとして選定されたわけである。

この文化アドバイザー会議の席上、口承文芸研究の観点から見ても、興味深い発言がいくつか見られた。

イタリア留学経験もある彫刻家渡辺成良氏は、「ヨーロッパでは、その地のシンボルとなるような女神が多く存在し、そうしたまちには、女神を象る彫刻などがシンボルとして置かれている。『手児奈』は、そうしたものに匹敵する存在ではないか」と発言した。

また、手児奈に関する多くの著作のある作家中津攸子氏は、「手児奈の話は、市の南部の行徳地域の人から見ると、自分たちの地域の話のようには感じられない」という意見に対し、「『万葉集』では、必ず〈葛飾の真間〉と詠われており、〈葛飾〉というのは、現在の東京都葛飾区から千葉県北西部一帯を指す地名であった。従って、手児奈は、今の真間という小さな地域の伝承ではなく、葛飾全体に関わる伝説上の人物と受け止めいいだろう」と発言した。この問題は、『遠野物語』という土淵村の佐々木喜善から聞いた話が、今では遠野市全体の話になつていて、といった問題とともに通底する、興味深い議論を提示してくれるものであった。

また、オペラ歌手の稻葉茂氏は、「単に文芸的なものに限定するのではなく、手児奈をテーマとした総合舞台公演を目指したらいいのではないか」という提案をし、「手児奈フェスティバル舞台公演」につながつていった。

このように、この事業は、元々、市民の中に手児奈を市川の文化的象徴だと見なす暗黙の認識があつたことを、行政の介在により顕在化させ、シンボルとしての位置付けを与えていったものということが出来よう。

2 「手児奈」に関する情報提示の方法

このような事業に対し、口承文芸研究者でもある論者が、行

政職員として関わる上で、一番留意した点は、「真間の手児奈」像を、どのような形で提示するかという点であつた。

手児奈は、すでに万葉集に伝説の女性として詠まれており、民俗学的には、「元来は水を司る巫女の存在だった」と解釈されることが一般的である。さらに、江戸時代になると、手児奈は継子だったとか、国造の娘で子どもまで産んだなど、さまざまな伝承が見られようになる。⁽⁶⁾

このような伝承状況も勘案し、論者が提示したものは、次のようなリーフレット（A4三折両面印刷）の表現であつた。

「真間の手児奈（手児名）」「ままのてこな」は、万葉集に歌われた美女で、多くの男性に慕われつゝも、だれに寄り添うこともなく、真間の入り江に身を投げたと伝えられる伝説のヒロインです。「葛飾（勝鹿）の真間」と詠まれたように、東国一帯に広く知られただけでなく、市川にあつた下総国府を訪れた都びとも慕われた存在です。

手児奈は、日本最古の歌集である万葉集に詠まれた、まさに市川の芸術文化の源であり、「ミレニアム文化振興事業——ホットアート2000」は、この手児奈を市川の芸術文化の象徴として取り上げようとするものです。⁽⁷⁾

こうした形を探つたのは、一つには、手児奈をモチーフにした作品を募集する観点から見て、あまり固定的なイメージを与

えてしまうよりは、できるだけ多くのイマジネーション・創造性を膨らませる余地のある方が望ましいと考えたからである。

また、□承文芸研究の観点からは、伝説には様々な異伝＝ヴァリエーションがあるものだろうが、行政なり大きな寺社などによつてある内容がピックアップされると、それだけが正しいもので他のものは間違つたものだという事態を生じさせてしまうことが、しばしば指摘されており、□承文芸研究に携わつてきた論者は、こうした点については、自覚的でありたいと思つたからである。

もちろんこれは、このリーフレットの表現が、まったくニュートラルなものであるということを言つてゐるのではない。「手児奈を市川の芸術文化の源」とする表現は、非常に政治的な解釈であるともいえる。しかし、それは、今回の事業の文脈において手児奈を捉えたものであり、そこから、どのような手児奈をイメージするかは、それぞれの受け手に開いてあるつもりである。

そして、より詳しく手児奈のことを知りたい人のために、市川市のホームページ内に手児奈に関するコンテンツを作り、リーフレットにそのアドレスを記載して、そこにアクセスしてもらうオリエンテーションを施したのである。⁽⁸⁾

ホームページでも、一つのテキストを前面に出すのではなく、様々な文献とその解題を並列的に提示し、アクセスした人が、多義的な手児奈と巡り会つてもらえるような仕掛けをしてみた

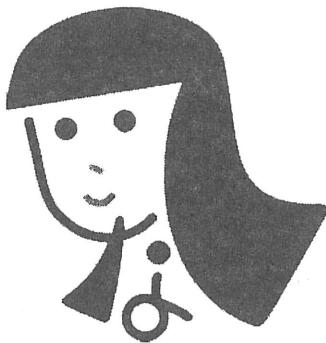
(注5・6の文献などを紹介している)。こうした情報提示方法の背景には、論者が図書館司書として勤務してきており、図書館司書的な情報提供の有りようには効果を感じているという側面もある。

そして、そうした多元的な情報の一つとして、市川民話の会編『市川のむかし話』(一九八〇 市川民話の会)所収のテキストを掲載する形を採った。これは、いくつかある再話テキストの中では、本書の内容がもつともオーソドックスであると、考えられたからである。

3 手児奈フェスティバルにおける手児奈伝説の位相

このようにして、全国から「手児奈をモチーフとしたシンボルマーク」二〇九点、「手児奈万葉集オリジナルメロディー」七一点、「手児奈文學賞」(短歌・俳句・川柳)二二六三点もの作品が寄せられた。

手児奈をモチーフにした
シンボルマーク(大賞)



立てた作品が大賞に選ばれた。

「手児奈文学賞」入選作品には、手児奈を取り上げた作品も多かったが、その一例を示せば以下のごとくである。

そよ風が帯のようだと言う妻は手児奈の歌を口ずさみおり
(短歌)

朗々と手児奈伝説説きたまふ二十年経るも師の御声顕つ

赤人の歌碑や梅雨めく片葉葦(俳句)

虫麻呂も聞きしか真間の蝉しぐれ

今ならば手児奈手取りを聞いて決め
(川柳)

また「オリジナルメロディー」は、二〇〇一年三月二十五日「手児奈フェスティバル」(市川市文化会館)において、市川市芸術文化団体協議会加盟団体によって、吟剣詩舞道、長唄、三曲、オペラといったさまざまな形で、舞台公演化された。そこでは、各ジャンルごとの編曲が施され、独自の手児奈像が描かれることがとなつた。¹⁰

こうしたことからも分かるように、この事業では、伝説そのものが語られたり表現されるというよりも、「手児奈」という伝説の主人公の固有名詞の持つイメージの喚起力が、大きなウエイトを占めているといえる。そこでは、「モチーフとしての伝説」が用いられ、「話の内容」それ 자체は、あまり求めら

れていないと言えてもいい。

それは、この事業が、多くの人に「手児奈」という伝説の主人公の固有名詞が受容され、そこから、その人なりの「手児奈」や「市川」に対するイメージが形象化されればいいという目的の事業だからである。

仮に、「手児奈」それ 자체を顕彰しようとしたとしても、人口四六万都市の市川市において、全市民が手児奈の話を受容することは考えにくい。よもやそなつたとしても、それが、地域に対する愛着や地域おこしにつながるとは思われない。市川市のような都市部においては、一つの□承文芸が地域全体のア

イデンティティを担うことは、求められないといえよう。

しかし、この「伝説の固有名詞から受け手が自分なりのイメージを抱いて、解釈、再創造していく」というプロセスは、伝説の在りようを考える上で、決して表層的な現象であるとは退けられないと考える。

伝説は、一般に指摘される通り、必ずしも話の内容を伴った言説としてのみ受容されるわけではない。例えば、遠野に住む人や遠野を訪れる人全てが、「河童淵」の河童の話を知り、「おしらさま」の話を語れるというわけではなかろう。むしろ多く的人は、「話の内容」を伝承しているというよりも、その固有名詞を耳にし、そこから自分なりのイメージを喚起して、それらを受容しているといつてよいであろう。⁽¹⁾

その意味で、この「手児奈フェスティバル」における伝説の

位相は、伝説の主人公をモチーフにして〈芸術作品〉に形象化するという点で、伝説そのものの継承とは異なるが、伝説の固有名詞からイメージを喚起して受容するという点においては、伝説の持つある種の役割を浮き彫りにしていると考えるのである。

そして、そこでの伝説の主人公が、あくまでモチーフとして表象化されているという点は、現代の都市社会における伝説の機能を示す興味深い事例であるとも、いうことができると考える。

4 地域文化と□承文芸研究

今日、□承文芸を「観光」や「地域おこし」の文脈においても捉えていこうとする研究が積み重ねられている。⁽¹²⁾

□承文芸は、それが行政に利用されると否とに関わらず、地域文化を形成する重要な要素であることには違いがない。もし、それが、地域文化のために活用されることがあつたとすれば、我々□承文芸研究者は、そのことに対し、学問的な立場から関わる道を閉ざしてはもつたいないのでなかろうか。

なぜなら、我々は、□承文芸の「過去の伝承状況」を踏まえつつ、「現在の伝承状況」を学問的観点から捕捉する学識力を持っているからであり、その成果は、地域文化をコーディネー^トする役割を、充分に果たし得ると考えられるからである。今後も、同様の事例が学界として蓄積され、□承文芸研究の新たな視座が展開することを望むものである。

注

- (1) 野村純一・劉守華編『日中昔話伝承の現在』(勉誠社
一九九六)、川森博司『日本昔話の構造と語り手』(大阪大
学出版局 一〇〇〇)、石井正二『遠野の民話と語り部』(三
弥井書店 一〇〇一) ほか
- (2) 抜稿「真間の手児奈」(ふちかわ・まち研究会編『市川ま
ちかど博物館』エピック 一九九七) ほか
- (3) 『手児奈フェスティバル』(市川市 一〇〇一) ほか
- (4) この辺りの雰囲気については、前掲(2)参照
- (5) 中津攸子『万葉の悲歌』(新人物往来社 一九七八)、『万
葉集の中の市川』(真美社 一九八九)、『真間の手児奈』
(自刊 一九九一)、『真間の手児奈』(新人物往来社
一九九五)、『真間のつぎはし』(自刊 一九九五)、「かつ
しかの真間」(珠玉社 一九九九) ほかがある
- (6) 手児奈については、鈴木恒男『さよへる手児名』(たく
みぱり工房 一九九六)、千野原靖方『手児奈伝説』(審書房
一九七七)、「市川の歴史を尋ねて」(市川市教育委員会
一九八八)、西川智泰『真間の里』(亀井院 一〇〇〇) ほか
- (7) 『市川ミレニアム文化振興事業ホットアート2000(募
集要項)』(市川市 一〇〇〇)
- (8) 市川市ホームページ内の手児奈のコンテンツは、一〇〇〇〇
年時から手を加えているが、以下より閲覧できる。<http://www.city.ichikawa.chiba.jp/bunka/tekona/index.htm>
- (9) 『一〇〇〇年市川を詠む「市川百歌百句』(市川市 一〇〇一)
- (10) 前掲(3) 参照。また、手児奈像の分析については、「変
容し続ける〈真間の手児奈〉像」(『昔話伝説研究』24 二
〇〇四) を参照のこと
- (11) 伝説における固有名詞については、山本吉左右『くつわ
の音がざざめいて』(平凡社 一九八八)、青木俊明「口承
文芸における固有名詞について」(第二七回日本口承文藝
学会大会研究発表) ほか
- (12) 抜稿「町おこしの中の田村麻呂伝承—福島県大越町の
「鬼おこしフェア」—」(『信濃』45—9 信濃史学会
一九九三)、拙稿「むかしむかしの話の中に」(橋本裕之編
著『日からウロコの民俗学』P.H.P.エディターズ・グループ
二〇〇一)、「口承文藝研究第21号 小特集 口承文藝
の現在—日本』(一九九八)、「口承文藝研究第23号 特集
メディアの結節点としての〈口承〉」(一〇〇〇) ほか

付記

本稿は、一〇〇三年度第二七回日本口承文藝学会大会研究発
表(六月八日／遠野市立図書館)の内容を基に成稿したもので
ある。会場で、一般市民の反応、子どもの関わり、その後の手
児奈伝説の受け止められ方などについて質問いただいたが、こ
の辺りについては、注(10)の文献において報告したい。

(ねえし・ひでゆき／市川市中央図書館)